

2 河川事業

平成 22 年 11 月 6 日（土）

セーヌ川視察

セーヌ川は、フランス北部、パリ盆地を流れる川である。ラングル高地から、パリ市内を貫流し、イギリス海峡に注ぐ長さ 780Km の河川であるが、パリを訪れる観光客の人気スポットになっている。

調査団は、当日は雨模様であったが、河川における水辺の魅力を実際にどのように創出しているのか船上から市街地を視察した。歴史的建造物などを生かした修景事業や景観など、隅田川などの景観事業を進めるに当たり街並みの美しさを損なわない整備のあり方は参考になった。

セーヌ川の観光事業を運営する会社はバトー・ムッシュ・カンパニーで、1949 年にシャン・ブルエルによって創立された。所有する船は 14 隻で、いずれも定員 1,000 人余の大型観光船である。

船着場は、アルマ橋の近くのポール・ド・コンフェランスで、およそ 1 時間の運航であった。なお、ナイト・クルージングでは、建物のライトアップではなく、船からサーチライトを当てて照明することのことである。



船着場入口



船着場の受付



船上からの景観

平成 22 年 11 月 7 日（日）

アヌシー川

平成 22 年 11 月 8 日（月）

アヌシー市役所

都議会自民党は、かねてより「水の都東京再生」に取り組んでいるが、この度訪れたアヌシー市は、人口約 5 万人、オートサヴォア県の県庁所在地で、ヨーロッパで最も透明度の高い湖として知られるアヌシー湖を中心とした絵のように美しい「水と緑と湖のまち」である。また、アヌシー広域共同体（SILA）の中心であり、スイスジュネーブに近く、2018 年冬期オリンピック招致と世界遺産登録に向けて、観光まちづくりを目指し大変意欲的に取り組んでいる。



アヌシー市役所



マリーノエル・プロヴァン副市長と

アヌシー湖から街の中心を流れるティウ川とヴァセ運河やサンドミック運河沿いの旧市街は、12 世紀から 17 世紀に建てられた中世からの歴史的建造物を中心に古い街並みが広がり、「アルプスのベニス」として親しまれている。

アヌシー市は、これら川沿いの旧市街地の景観保全及び水辺の賑わい創出等のために様々な努力をしており、その結果としてこれらの景観は実現したものである。例えば、市内で発生する汚水はもとより、処理済の排水もアヌシー市から離れた位置にあるル・フィエール川に排水し、アヌシー湖や市内の川や運河に一切流入させないシステムを確立することでアヌシー湖の良好な水質が保たれているとのことである。

また、水辺の賑わい創出について、8 月には花火大会、オクトビルとしてストリート芸術を 4 日間開催、10 月にはアルプス生還祭を催し、市内を動物が練り歩き、酪農をアピールしている。そのほかアヌシー国際アニメーションフェスティバルも開催し、これが縁で、東京都練馬区との交流がなされているとの

ことである。

アヌシー市では1950年代に、美しい街並みを守るため環境保護の方針を打ち出し、行政と市民が一緒になって「花と緑の街づくり運動」を進めてきた。

その努力が実って、1967年「国際環境美化賞」、1983年「国際環境保護欧州ブロック金賞」を受賞。フランス国内の「花飾り市町村コンクールの優秀賞」を長年受賞している。



市街地の緑化

建物や街角は、花で飾られている。



運河(ティウ川)が花で飾られている。

花や緑の管理については、市が行うものと個人が植栽しているものがあり、個人については、毎年「最も美しいバルコニーコンテスト」を実施するなど緑化を図っている。

しかし、現在、管理において市と住民との連携は、緑化は市で管理するという市民の意識が強いため、必ずしも充分とは言えず、今後の課題となっている。

次に、アヌシー湖周辺を案内頂き、現場で湖畔や河川での係留施設や船着場の管理ルールについても説明を受けた。

湖畔には船が整然と係留されていたが、湖面はフランス政府が責任を持ち、河岸と船着場は市に責任がある。

係留施設は、342カ所あり、アヌシー市民であること、個人の所有であることを条件に、3年契約で年間60ユーロで停泊できるが、申込みが多く、現在では360人が申請中であり、7年間待たされるとのことである。

暫定使用は3ヶ所一週間を許可し、栈橋は2時間は無料で停泊できる。停泊許可書のない不法係留は、レッカー船で移動するとのことである。



アヌシー湖の栈橋

平成 22 年 11 月 10 日（水）

アムステルダム市役所

ウォーターネット社

○アムステルダム市役所

アムステルダム市の運河地区は、2010 年 8 月にユネスコの世界遺産に登録され、飲める水道水を持ち、北のベニスと言われる街づくりに取り組んでいる。

「水の都アムステルダム」は海上交通の要衝として栄えた都市で市内に至るところに水路網が張り巡らされ、大小 165 の運河に 1,300 の橋が架けられている。運河にかかる橋のなかには伝統的なはね橋もある。また、運河沿いには歴史的建造物とオープンカフェがあり、運河を中心にしたイベントやシングル運河沿いの常設の花市場は、多くの観光客で賑わっている。

アムステルダム市からは、水辺の賑わい創出や、花と緑の街づくり運動、係留施設や船着場の管理ルール等、示唆に富んだ意見を伺うことができた。



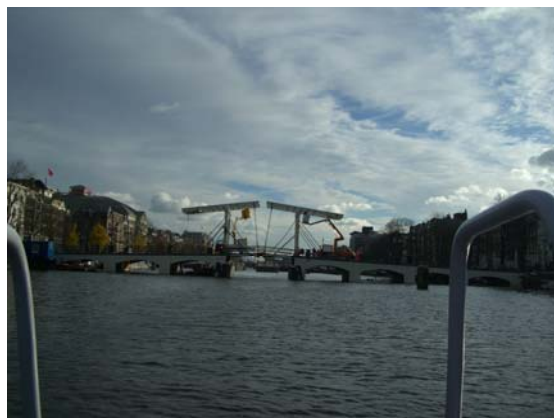
アムステルダム市役所にて



市役所裏の水上タクシー乗り場



栈橋



はね橋

シングル運河沿いの花市場地区



花のデリバリー車

- ウォーターネット社（アムステル、ゴーイ、フェクト河地域水管理委員会とアムステルダム市の出資による水サイクル事業会社）

「水の問題は、統合して考え、統合して解決していく」

「水は自然のためにある。自然は水のためにある」

～ウォーターネット社の精神～

アムステルダム市の運河・河川の水環境及び護岸と上・下水道事業は、ウォーターネット社により管理・運営され、運河、水、川をテーマに歴史を活かした街づくりに取り組んでいる。

現在、ボートハウス（水上船住居）を使い、空間と動きのある持続的な町が形成され、運河など水上ではイベントが実施されたり、観光船や水上バスが就航されるなど観光活用される一方、人々の生活を支える物資輸送のボートが走っている。

観光資源であり、かつ生活の場でもある運河の水質を維持するため、冬は2回/週、夏は4回/週、アイセル湖からきれいな水を運河へ汲み入れ、その水が市内の運河を経て、北海へと古い水を押し流している。（昔はボートハウスの汚水が、運河に直接放流されていたため、毎日プールを繰り返していた。現在は下水道に接続する義務がある。）

EU（欧州連合）のガイドラインによる水質管理をするに当たり、汚水を浄化するための貯水池を40箇所持っている。



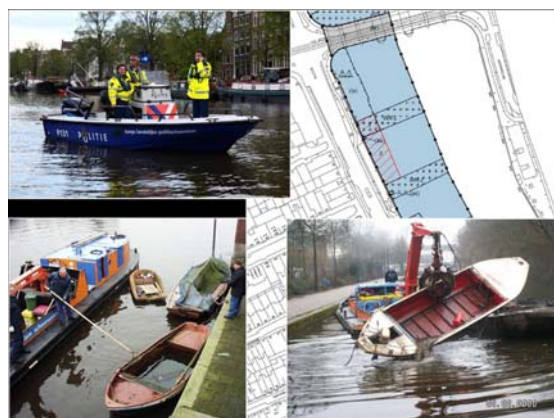
ウォーターネット社前にて



ビル前にある雨水の貯水池で水位を調整

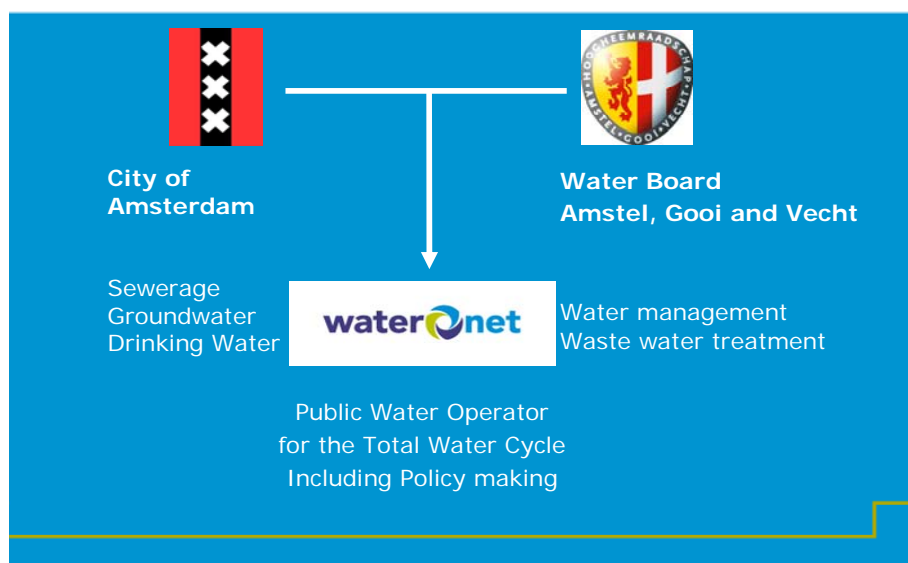


スライド等による事業説明を受ける

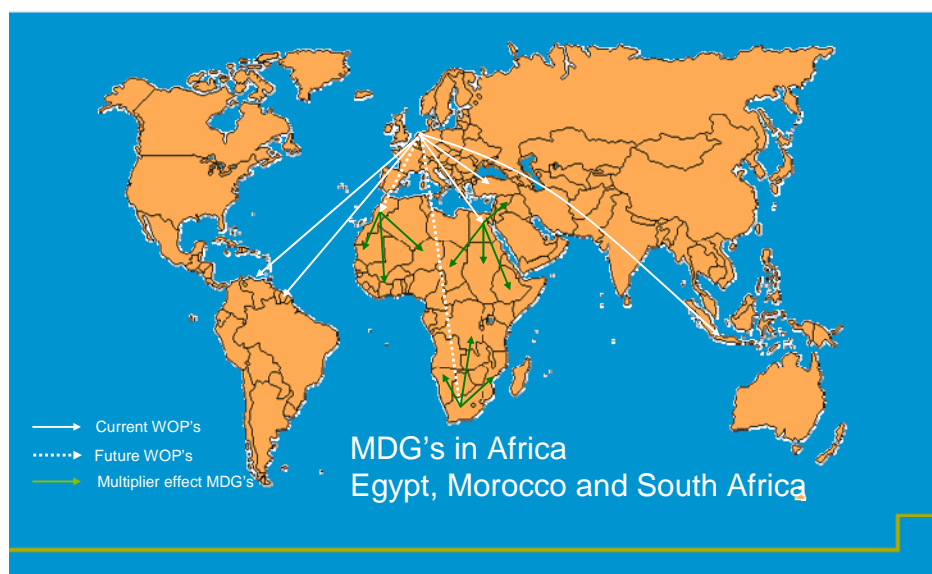


不法係留船の撤去作業
<出典：ウォーターネット社資料>

■ ウォーターネット社の概要



また、関連会社であるワールド・ウォーターネット社は、国連、EU 関連のプロジェクトとして、アフリカを始めモロッコ、サウジアラビア、エジプトなどで水事業のジョイントしている。また、インドネシアについては、東京都の水事業に連携して取り組みたいとのオファーもあった。



<出典：ウォーターネット社資料>

平成 22 年 11 月 11 日（木）

アムステルダム市（エイ湾南岸再開発プロジェクト）

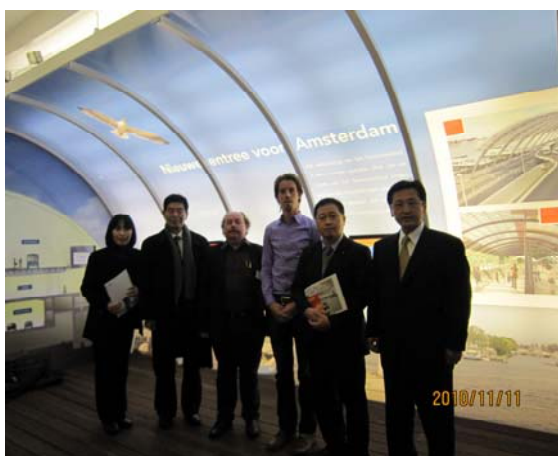
エイ湾の東港湾地域は、倉庫や造船所などのある港湾地域として使用されていたが、港湾機能の移転に伴い、使用されなくなった施設群はスラム化してしまいった。その後、アムステルダム市はその旧港湾施設用地を、住宅不足のアムステルダムにおける良質な住宅地に再生する、再開発に着手した。

再開発に当たっては、地区ごとに担当する建築デザイナーを定めることにより、各地区に統一性のあるデザインの優れた住宅が供給された。また、橋梁についても特徴的なデザインが採用されている。スラム化した街がデザイン性豊かな再開発によって高級住宅街に変身した、再開発の成功事例である。

再開発プロジェクトは現在、エイ湾南岸において進行中であり、このプロジェクトにより 2020 年には 2 万戸、2050 年には 5 万戸の開発が予定されている。供給する住宅の住戸面積は、70～200 m²で、全戸数のうち 30%は社会住宅(国の助成金あり)、70%はユニット住宅(フリーセクター・自由売買できる住宅)としてこの地域に建設する予定である。

また、アムステルダム駅の利用者数増加に対応すべく、アムステルダム市、オランダ鉄道 (NS)、オランダ政府の代わりとしてプロレイル社との協力により取り組まれている、ステーション・アイランド・プロジェクトもエイ湾南岸再開発の一環として進行中である。

このプロジェクトにより、地下鉄南北線工事を含むアムステルダム中央駅周辺のインフラ整備、景観美化などが進められている。



事務局の皆さんと



スライド等による事業説明を受ける